

数研 AGORA

▶探究学習と哲学対話

—高校への導入の意義と問題点

／梶谷真司……1

▶新科目「公共」をどのように展開するの

／堀 一人……4

No.73

この用紙は、再生紙を使用しています。

探究学習と哲学対話 —高校への導入の意義と問題点

東京大学教授
梶谷 真司

はじめに

近年、学校・教育関係者で哲学対話に関心を寄せる人が増えているように思われる。その背景には、以前からアクティブラーニングが推奨されてきたこと、新学習指導要領で「総合的な探究の時間」が導入され、「主体的・対話的で深い学び」が目標として掲げられたことがある。

実際私自身、教育困難校と言われる東京の都立高校で哲学対話を実践したが、大半の生徒が大学進学をしないこの学校で、対話に参加した生徒が続々難関大学に合格していった(日本経済新聞2019年5月14～18日「キセキの高校」を参照。電子版もある)。

この事例からも分かるように、哲学対話は考える力とともに自ら学ぶ探究的姿勢を養う可能性を秘めている。だが、「探究」に教育の重点を置く意味を理解しておかないと、哲学対話も活用されないか、表面を真似るだけで、かえって混乱を招く恐れがある。

そこで本稿では、まず探究学習を導入することの意味について述べ、その後哲学対話の説明をする。そのうえで哲学対話を学校で行うさいの意義と問題点について考える。

1. 探究学習は何をもたらすのか

探究学習で重要なのは、生徒が自分自身の関心に従って学ぶことである。このことは、学校教育全体にどのような変化をもたらすのだろうか。

これに答えるには、そもそも学校がどのような場なのかを考えなければならない。思うに現状の学校は、教える場ではあっても、学ぶ場にはなっていない——先生は熱心に教えているのに、生徒は学んでいない学校と、先生はあまり教えていないのに、生徒は熱心に学んでいる学校があったとする。前者はいかにもありがちであり、後者はあまりありそうにない。だが、学校としてどちらが望ましいかと言えば、明らかに後者であろう。

探究学習を導入するとは、簡潔に言えば、学校を“教える場”から“学ぶ場”に変えるということである。そのさい、教師の役割は「教える」から「学ぶのを支える」「生徒と共に学ぶ」に変わる。生徒の役割は「教わる」から「学ぶ」「互いに教わる」に変わる。このように探究学習によって、学校全体が根本的に変わらなければならない。

もちろん、実際にはそこまでの変革は難しいだろう。けれどもその基本的な方向性を理解していないと、その場しのぎの対応をして、ただ現場の混乱と負担が増えるだけである。哲学対話を導入するさいにも、その点を踏まえておく必要がある。

2. 哲学対話との出会い

哲学対話は、1960年代にアメリカで始まった「子どものための哲学(Philosophy for Children: P4C)」に由来する。この活動は難しい哲学者の思想について教えるのではなく、思考力を育てるもの

であり、そこで「対話」が主たる手法として開発された。

現在、P4Cは世界中で広がっており、各国の事情に応じて様々な特徴がある。日本のP4CのほとんどはハワイのP4Cの影響を受けており、私自身2012年に現地で見える機会に恵まれた。そこで子どもたちが輪になって話しながら、とても楽しそうに考える姿に感銘を受け、これは子どもだけではなく、大人にとってもいいのではないかと感じた。

その後私は、学校のみならず企業や地域コミュニティ、子育てサークルなどで、哲学対話を実践してきた。とくにここ4年ほどは、学校で生徒向けの哲学対話、教員研修、カリキュラム作りに深く関わっている。以下、こうした活動を通して得た知見に基づき、哲学対話について説明していこう。

3. 問う・考える・語る・聞く

私は哲学対話を「問い、考え、語り、聞くこと」と定義している。私たちは、一人でものを考えている時も自問自答しており、思考とは自己との対話である。逆に他者との対話は共同の思考だと言える。したがって、哲学とは対話なのである。以下、哲学対話について、この四つに分けて説明していく。

「問う」とは自ら問うことである。学校で問いと言えば、教科書の中にあるか、先生が与えるものである。だが、それは自分の問いではない。自分が関心を持ち、疑問に思うことを問うことが重要である。

「考える」とはそうした自分の問いを考えることである。それではじめて主体的に問うことができる。与えられた問いを考えるのは、無理やり考えさせられているだけで、そこに主体的な思考はない。

「語る」とは考えたことを言葉にすることである。とりわけ対話では、他者に向けて語るのも、人に伝わる言葉と論理で伝えようとする。そこではじめて思考は明確な形をとり、共有可能になる。

「聞く」とは、他者の言葉を受け止めることである。私たちは、人が聞いてくれるから語ることができる。その意味で聞くことは語ることを支えている。

4. 対話のやり方とルール

次に、哲学対話が実際にどのように行われるのかを説明していこう。適正人数は10人から20人くらいで、全員が輪になって座るのが通例である。

教室では、先生が前に立って、生徒は列になって前を向いて座っている。これは原則的には教師だけ

が発言権をもち、生徒はみな黙って聞いていなさいという意味である。そこで生徒は問うことも語ることもない。だから考えることもない。

他方、円は前も後ろもない。だから、輪になればお互いに対等になり、誰もが発言していい場となる。そして対話のテーマは自分たちで決める。参加者一人一人が問いを出し、その中から投票で選ぶ。このように自分たちで問いを見つけることが、主体的に考える土台になる。

問いが決まったら、対話を始めるが、いくつかのルールがある。私は以下を対話のルールにしている。

- ①何を言ってもいい。
- ②人の言うことに対して否定的態度をとらない。
- ③互いに問いかけるようにする。
- ④発言せず、聞いているだけでもいい。
- ⑤知識ではなく、自分の経験にそくして話す。
- ⑥意見が変わってもいい。
- ⑦話がまとまらなくてもいい。
- ⑧分からなくなってもいい。

ルール①は最も重要である。何を言ってもいいところにしか、思考の自由はない。しかし私たちは普段周りを気にして言いたいことを言わない。否定されたり、恥をかいたりするのを恐れるからだ。

だから「否定的態度をとらない」というルール②がある。否定されなければ、安心して言いたいことが言える。とはいえ、相手の言うことに常に賛成しなくてもいい。違う意見を言ってもいいが、否定する必要はない。代わりに質問すればいい。

そこで、ルール③の「互いに問いかけるようにする」が重要になってくる。ただうなずくだけで聞き流すのではなく、分からないこと、納得できないことがあれば、「なぜそう思うのか」「それはどういう意味か」等と問えばいい。そうすることで、お互いに考えを深めることができる。

ルール④の「発言せず、聞いているだけでもいい」は、無理やり話をさせられずにすむようにする。私たちはしばしば発言を求められる。しかしそうすると、その場しのぎで無難なことを言ってそれ以上考えようとしなくなる。話さない自由がなければ、話す自由もないのである。

ルール⑤の「知識ではなく、自分の経験にそくして話す」は、多様な人が参加できるようにする。学校でも社会でも、知識を身につけて話すのがいいとされる。しかし、それでは知識の多い人(学歴の高

い人、年上の人、専門家)が対話を支配し、他の人はただ聞くだけになる。知識に依拠しないのは、いろんな人が対等に話すのに非常に重要なことなのだ。

ルール⑥は「意見が変わってもいい」である。哲学対話は、共に考える場であって、自分の立場を主張し、守る場ではない。むしろ自分の立場を固定せず変えた方が、思考の幅が広がる。

ルール⑦の「話がまとまらなくてもいい」も、自由に話すために重要である。普通は話がまとまらないのに話すのはよくないとされるが、それも気にしなくていい。

最後のルール⑧「分からなくなってもいい」は最も哲学的である。私たちは通常「分かりました」と言うのがいいと思っている。だから分かていなくても「分かりました」と言う。だが「分からない」とは、問うことがあって考えることがあるということなので、哲学対話では常にいいことなのだ。

5. 哲学対話がもたらすもの

哲学対話の定義にある「問う」「考える」「語る」「聞く」、輪になって話す、対話のルール——いずれも学校教育とはまったく違っているか、むしろ正反対であることが分かるだろう。

もし哲学対話が考える力を養う条件を提供しているとすれば、学校というのは、考える力を育てる場所になっていないということである。

そもそも私たちは問うことに慣れていない。探究学習のみならず、学ぶためには問いが必要であり、どんな疑問でも認められてはじめて、考えることの面白さも、思考の深め方も広げ方も分かる。そうすることで自分の関心に従って探究ができる。

また自分で考えたことを他者に伝えようとすれば、言葉の選び方、話の組み立て方も身につく。さらに対話を通して異なる意見を聞くことで、自分の考えの前提に気づいたり、自分の立場をより広い文脈に位置づけたりできるようになる。

また自由に発言し、相互に問いかけることで、互いを尊重し、違いを受け止められるようになる。多様な人がどうすれば共にいられるのか実感をもって理解できる。実際、哲学対話をしただけで、初対面でも仲良くなるのがしばしば起こる。だから学校で行えば、生徒どうしの関係、教師と生徒の関係もよくなる。そうすれば、授業もしやすくなるし、いじめや不登校などのクラス内のトラブルも減るに違いない。当然、全体の成績もよくなるだろう。

こうしたことは、前出の「キセキの高校」の記事からも分かるように、進学校でも教育困難校でも起こりうる。この点は強調しておきたい。

6. 学校に導入するさいの問題点

以上はある意味で理想論である(と言っても、多かれ少なかれ、似たことが起こる)。実際に対話を学校に導入しようとする、様々な障壁にぶつかる。

まず、ファシリテーションの仕方が分からない。それを身につけるのは、現場の先生にとってかなりの負担感があるだろう。かといって外部の協力を求めるにも、都合よく必要な人数が見つかるとは限らないし、そのための予算を確保するのも難しい。

また従来通りに教科書やプリントを使った知識伝達型(詰込み型)の授業をしようすると、哲学対話をする時間と折り合いがつきにくい。下手をすると、無駄で邪魔に思われてしまう。それにただ対話をすればいいわけではなく、どのように授業に組み込むかは、一概に言えない難しい問題である。

哲学対話によって生徒が興味をもって学ぶようになって、多くの先生にとっては、それを尊重することじたいが難しいだろう。生徒の興味に任せれば、関心のないことは学ばなくなるかもしれない。

また、ある問題に興味をもったとしても、しばしば複数の教科にまたがっていて、さらには学校で教えていることを超えているかもしれない。先生が答えられない、教えられないことも出てくるだろう。

学校を“教える場”から“学ぶ場”に変えるというのは、まさにそういうことである。だから教えるよりも生徒の学びをサポートし、共に学ぶ姿勢が必要とされるが、それもまた容易ではないだろう。

もう一点、進学実績の向上と矛盾する恐れがある。生徒が自分の関心から学ぶことは、大学入試で問われることと一致しない。だから探究学習は、大学入試の準備にはなりにくい。関心に従って学び、関心に従って進学先を選ぶと、偏差値で大学を選ばなくなる。一般に期待される進学実績は、場合によっては下がるかもしれない。

とはいえ実際には、一方的な授業や詰込み型の学習に比べると、自分の関心に従って学ぶのは圧倒的に楽しい。意欲をもって学べば、楽しくない受験勉強もやるようになり、結果的には進学実績も伸びることが多いだろう。だから学校を“学ぶ場”にするという大原則さえ守れば、探究学習も哲学対話も思いきってやってみればいい、と私は思う。